
LAST SMILE

若宮櫻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LAST SMILE

【Nコード】

N0715H

【作者名】

若宮櫻

【あらすじ】

機動戦士ガンダム00のFFです。1期の後半から始まるロックオン×ティエリアのボーイズラブ小説ですので、お嫌いな方はご遠慮ください。1期終了後の空白へと続きます。

知らない場所で、ココと違う離れた場所で、“大切な何か”が消えた気がした。

『 …… ロックオンツ …… ロックオンツ …… ロックオンツ ……
ロックオンツ …… 』

無感情なはずの電子音声で繰り返される名前に、悲痛な感情が聞き取れて……

自分の感覚が真実なのだと、私は大切な人を失ったのだと、その瞬間 知った。

まだ人間が地球から離れ切れずに居る世界で、そう遠くない宙に身を潜める組織があった。

“ソレスタルビーイング”

戦争根絶を謳い、武力を行使する者たちへの武力介入を始めた、私設武装組織である。

矛盾を抱えながらも、兵器であるガンダムを保有し戦う。世界中の人から批判、罵倒を受けながらも戦う。

地球上の人間、全てを敵に回したとしても戦い続ける。

ソレスタルビーイング、ガンダムマイスター・・・それは、紛れもなく「人」だった。

戦争の非道さを知っている、「人心」だった。

「っ何故だ、どうしてだ！！ どうしてロックオンが死ななければならなかった！！」

ソレスタルビーイングの輸送船プロマイオスの中、ガンダム収容コンテナに興奮した声が反響する。

叫びながら、ガンダムから降りてきた少年に掴みかかったのは、その少年とそう変わらない年齢の青年だった。

肩まである髪を振り乱し、細い指は力の限り少年の首元を掴む。

「貴様が・・・貴様が地上になど降りなければあつ！！」

「・・・」

俯く少年に見せ付けるように、青年は操縦者の居なくなった機体を指差した。

大部分が破損し、無残な姿となった機体に数時間前までは操縦者が乗っていたのだ。

確かに、青年の大切な人が居たのだ。

「っ・・・どうして・・・！」

「やめなさいティエリア。・・・刹那は自室に戻ってなさい」

騒ぐ声に駆けつけてきた妙齢の女性が、冷静な声でたしなめる。

青年 ティエリアは、その声に僅かに理性を取り戻し、力を込めていた手を緩める。

俯いたままだった少年 刹那は、苦い顔をあげてティエリアを見た。

「・・・すまない」

謝罪の言葉に、ティエリアの顔が歪む。堪えていた涙で、瞳が滲む。違う、違うのだ。

「・・・謝るな・・・」

泣き顔を見せまいと視線を逸らし、小さく声を絞り出した青年。少年もまた、視線を逸らして、哀しみに震える青年の横をすり抜けて自室へと向かった。

二人きりとなったコンテナで、ティエリアの肩に女性の手がのる。

「責めるなら、指示を出した私を責めなさい。・・・彼を殺したのは私よ」

軍師からの“殺した”という言葉が、今のティエリアの胸には深く突き刺さった。

残骸となったガンダムに乗っていた操縦士であるロックオン。彼の死が、真実だと突きつけられる。たとえ遺体が発見できずとも、変えようの無い事実なのだ。

それはティエリアにとって、哀しみと共に恐怖であった。憎しみの対象を見つけてしまうことが。

誰かを憎めば、それだけ自分には楽になる。全ての哀しみを憎しみに変えて、他人に向けて放てば良い。

しかし、それで楽になる事が恐かった。彼女を憎しみの対象としてしまうのが恐かった。自分が、簡単に理不尽な憎しみを人へ向けるのが恐かった・・・。

彼女は、わざとこんな酷い言葉を使ったのだ。

自分を憎ませて、ティエリアを慰めようとしている。

けれど彼女の言葉通りに責めるようなセリフを、ティエリアが言う事はなかった。

ティエリアの恋人だったロックオン。

彼が自分の意思で戦場に出て、全力で戦ったのだと知っている。

そしてその死が誰のせいでもない事を、ティエリアは理解していた。

「スメラギ・李・ノリエガ・・・次の作戦行動は？」

長い沈黙の後、表情を見せずに言ったティエリアにスメラギは苦笑し、肩に置いた手に力を込めた。

「あなたは少し頭を冷やさない。いつもの冷静なあなたに戻ったら、ブリッジに来てちょうだい」

「・・・はい」

そう・・・年上の彼女の優しさに、頷いたティエリアだった。

恋人の死に動転し自分を失ったティエリアだったが、スメラギの言葉に従い冷静さを取り戻し、再び戦場へと飛び立った。

例え仲間を失ったとしても、組織の一員である限り戦いを止めるわ

けにはいかない。

それは、ソレスタルビーイングの全ての者が覚悟している事で、テイエリアも例外ではなかった。

しかし、長い戦いで疲弊し憔悴したプトレマイオス乗員にとって、この戦いが限界であった。

少人数で戦い続けた味方に対して、敵である国家連合軍は何倍もの数の艦隊。

それでも怯まず、向かっていったガンダムマイスターたちは、鬼神の如き戦いぶりで多くの敵機を落とし、退けた。

だが現実には、プトレマイオスもガンダムも戦闘不能となり、連合軍の勝利が地球各国に伝えられる事となった。

数日後、地球上ではソレスタルビーイングを壊滅させたと、悪を倒した英雄の様に連合軍が誉めそやされている頃、軍の探索が及ばない宙域で葬儀はしめやかに行われていた。

「黙禱」

小惑星に似せて造られたソレスタルビーイングの母船。それは強大な組織の皆を収容出来る程巨大で、最先端の研究をする研究者が多く加入しているおかげで、地球の国々、国連さえ持たない技術が随所に使われ、疑似重力さえ実現していた。

その中心部分にある広い礼拝堂で、代表者の声と共に一同頭を下げた。

様々な人種が集まるこの組織で、それぞれの宗教の形で祈りを捧げる者たち。

その中に、プトレマイオスの面々の姿もあつた。体に怪我をおいながらも、戦場を生き残つた者達だ。

テイエリア、刹那、もう一人のガンダムマイスターであるアレルヤ、スメラギ、整備士であるイアン、オペレーターであるフェルト。

その他の者は、慰霊碑に名前が刻まれた。

礼拝堂と言つても、宗教の違いを理由に神仏の像などは置かれていない。代わり中心に、縦横10mほどの白い石版が鎮座している。戦う者の遺体の回収は難しく、たとえ戦場以外の死者であっても、埋葬する土地を持たない組織では大半が宇宙葬だ。

そのため、せめてもと慰霊碑が造られたのだ。

合同葬儀が終了し皆が礼拝堂を出ても、動かない人影があった。

「本当に、死んでしまったんだな。ロックオン・・・」

ティエリアだ。

慰霊碑に刻まれた真新しい名前を、そつと指でなぞる。

『・・・一応、これからは仲間って事だろう？ よろしくな』

『失敗ぐらいするさ、人間なんだから』

『いつまでそうしているつもりだ？ らしくねえな』

『俺がお前の事を好きって言ったら、お前ど

うりする？』

『ティエリア・・・』

その名前に触れるたび、ティエリアの脳裏には在りし日の恋人の姿が甦っていた。

他人と関わる事を嫌い、必要以上の接触を避けていたティエリアに根気よく接し、プロレマイオスに乗る人員を仲間と呼べるまでに彼を変えたのは、ロックオンだ。必然の様に恋人同士になった後も、ロックオンの優しさが尽きる事はなかった。

見上げる高い身長。触れる大きな手。耳に響く心地よい声。周りの緊張をほぐす笑顔。内に炎を秘めた瞳。だれかれ構わず、気軽に声をかける人だった。誰からも好かれる人だった。

『全てが終わったら・・・そうだ、俺の故郷へ行こう。良い所だぜ、冬は寒いけどな』

生き残ると、約束していた。

『作戦も大切けどなあ、自分をもっと大切にしろよ！ お前の葬式なんざ、俺は絶対に出席しないぞ』

果たされなかったけれど。

「どうして、どうして私の前から消えたんだ、ロックオン・・・」

青白いティエリアの頬を、涙が伝う。

雫は問いかけるように、死者の名前の上にはぼつりと落ちた。

『シュンッ』

音を立てて入り口が開かれる。

気付いてティエリアが振り返ると、足を踏み入れたのは刹那だった。

「あ……」

刹那は対面した顔に涙を見つけると、気まずそうに視線を泳がせる。あまり感情を出さない人物の涙は、見てはいけない様な気分になる。不自然に視線を落としながら、ここへ来た用件を告げた。

「……スメラギ・李・ノリエガが、呼んでいる」
「分った。……すぐ行こう」

テイエリアは涙を拭くと、何事も無かったような顔をして呼ばれた先へと向かうが、僅かに赤い目元を刹那はジッと見つめていた。

着いた先は小規模の会議室で、刹那とテイエリアが入るより先に、スメラギとアレルヤが中で待っていた。集合をかけられたのはこの面子だけだったようで、呼び出した本人であるスメラギが早速話し始める。

「……先の戦いで臨時に結成された各国のエリートを揃えた連合軍だけど、グリニツジ標準時で三時間前に、正式に地球連合軍として

活動していく事が発表されたわ。つまり事実上、地球は一つになつた。

・・・様々なイレギュラーも有つたし、多くの犠牲は出たけれども、一応、これで第一段階はクリア」

淡々と話すスメラギを、ガンダムマイスターたちは静かに見つめていた。

何かを発言するわけでもなく、黙っていた。

「嬉しくないの？ 作戦は成功したのよ？」

そう言うスメラギも終始、苦い顔をしていた。

「・・・色々あつたものね、私も素直に喜べない。 だけど、全ての作戦を成し遂げなければ」

哀しみを含みながらも、覚悟の決まったスメラギの瞳を見て、三人はこの部屋に入って初めて言葉を発した。

同意の言葉を、強く頷きながら。

散った仲間への、手向けとする為に。

「でも今は、身を潜める必要もあるし、ガンダムも動かせない。それにみんな、ボロボロだしね」

若いマイスターたちの心が決まっていると、そう確認できたスメラギは、真面目な雰囲気崩し茶化す。

だが事実、マイスター三人の体は安静が必要な程に損傷していた。ティエリアと刹那は表面的には何事もなさそうだが、服の下には深い傷を負っており、顔色があまり良くない。

増してや、アレルヤは右目を失い、数日前まで生死の境を彷徨った

ほどだ。

「あなたたちの怪我が治ったら・・医療班から完治の報告が来たら、第二段階への準備を手伝ってもらおうわ。・・だから、それまで休みなさい。以上」

どんなに思いが強かろうと、能力を持つていようと、長く発揮し続ける事は困難だ。

戦士にも休息は必要だと知っているスメラギは、軍師として・・年長者として、常に糸を張り詰めているような青年たちを見た。

手負いとなりながらも、複雑な想いはその身に激流の様に渦巻いていることだろう。

苦笑しそつになるのを押さえ、せめて肩の力を抜ける様に「じゃあね」と、退室していく彼らに笑いかけた。

同時に部屋を出た三人は、真っ直ぐな廊下を黙って歩く。

今まで作戦行動で、長い期間を共に過ごしてきた彼らだが、組織という性質上、あまりプライベートを話す事がなかった。

作戦を遂行する者同士という接し方をしてきたせいで、作戦から離れてしまえば、何気ない世間話でさえする事が出来ない。

その気まずい雰囲気を打ち破ったのは、アレルヤだった。

「二人とも、これから・・・予定は？」

ことさら明るく話しかける声に、スツと二人の視線が向く。ちらりとティエリアを見てから、刹那が答えた。

「自室に戻るだけだ」

「そうか・・・時間も頃合だから本当は、一緒に食事しない？　つて二人を誘いたいんだけど、僕が医師に呼ばれててね」

苦笑した顔には、包帯が何重にも強く巻かれている。

いつもアレルヤは長い前髪が右目を覆い隠しているのだが、怪我の治療するには邪魔なのだろう。後ろで括っている。

そのせいか白い包帯が露わになり、吸い寄せられる視線があった。

「それに・・・」

自分を、自分の右目を見つめる視線に気が付いたアレルヤは、その瞳を見つめ返す。

「どこかの誰かさんは、僕と居ると辛そうだから・・・」
「っ・・・」

息を呑み、今にも泣きそうな表情を隠そうとしたのは、ティエリアだった。

意識していなくても、視界の端に右目の包帯が入ると、つい目で追ってしまうのだ。

大切な故人を思い出して。

ロックオンは死の少し前に戦いで負傷し、利き目である右目の視力

を失って、それ以後は眼帯をしていた。
鮮明に覚えている別れまでの時間、ティエリアの記憶の中に彼の眼帯が強く残っているのだ。

「・・・すまない、不躰だった・・・」

ティエリアはあまりにジツと見ていた事を自覚し、恥じた。
自分の前に居るのがアレルヤであると、恋人ではないと分っているのだが、その白い包帯が眼帯を思い起こさせて、気になってしまうのだ。

「良いよ、気にしない。だけど怪我が治ったら・・・一緒にごはんを食べてね」

例えプライベートを話さないとしても、長い時間を共に生活すれば、それなりに相手の事は分るものだ。
アレルヤも今のティエリアの精神状態に気付いているからこそ、何気ない会話として話を終わらせた。
笑ってひらひらと手を振りながら、アレルヤは二人と違う廊下を進んだ。

自分の背後で、少年が青年を気遣い肩を抱く様にして、個室まで送り届けると分っていたから。

01 (後書き)

サイトにも遊びに来ていただけると嬉しいです。

<http://sweety.jp/offlimits/>

『 リア…… 』

遠くから声が聞こえる。
知っている声だ。

『 …… ティエリア…… 』

低く甘い声。

幾度と無く耳元で囁かれた、自分の名前。
彼だ。

私の、大切な人。

蒼い瞳は、視線が合うたびに微笑みくれた。
華奢な自分と比べてたくましい腕は、いつも安らぎをくれた。
少しクセのある髪が、頬をくすぐる感触が好きだった。

気が付くと、長い指は私の髪に触れていて……、何が楽しいのか

分からないが、飽きもせず指を絡めていた。
まるで・・・好きだと伝えるように。

使命しか持ち合わせない私に、呼吸の仕方を教えてくれた。
破壊する事しか知らない私に、守るといふ事を教えてくれた。
自分さえ愛せない私に、人の愛し方を教えてくれた。

俺は・・・僕は、
私は・・・アナタに何を与えられただろう・・・
？

ソレスタルビーイング母船、その右舷には居住空間がある。
既婚者や独身者の為に大小様々なのだが、基本的には端末を備え付けた机、それにベッドと狭いシャワールームしか取り付けられていない。

クローゼット位はあるのだが、研究者が多いこの組織で、部屋を飾り立てるなんて事をする人間は皆無で、子を持つ既婚者たちは別だが、殆どが部屋には寝に帰る位なのだ。

その中の独身者の部屋が並ぶ層を、早足で進む刹那とアレルヤの姿

があつた。

「君が彼を最後に見たのは？」

「・・・三日前だ」

合同葬儀から日も経ち、両者の怪我は大分回復していた。

刹那の顔色も良くなり、アレルヤの右目は痕さえ残しているが、包帯は取り去られている。

しかし体の回復とは別に、深刻な顔で二人は居た。

向かっているのは、ティエリアの個室だ。

「この三日、誰も姿を見ていない。・・・ちゃんと様子を見ていれば・・・」

「君だつてティエリアを気遣つて、だからそつとして置こうと一人にしたんだらう？」

「・・・」

刹那は、アレルヤに凶星をつかれて苦い顔をした。

年かさが理由だらうか、それともアレルヤの性格的なものだらうか。隻眼の青年は、この少年の瞳が出逢つた頃から、ティエリアを見つめている事に気が付いていた。

ティエリアの気持ちが自分に向いていない事を知りながら、一途に支えようとすする刹那を、戦友として・・・友として見守つてきたのだ。出来る事なら、皆が幸せになつてほしいと。

「食事もしないなら、一人にするのは失敗だつた」

「確かに心配だけど・・・そういう君だつてちゃんと食事してる？」

ティエリアの事、気遣い過ぎじゃない？」

「・・・お前だつてそうだらう」

何事にも真つ直ぐで、他が見えなくなってしまう傾向にある少年を心配して言ったのだが、下から睨む目にアレルヤは目を見開く。刹那が見ているのはアレルヤの右目、怪我を負った場所だ。大きな傷痕は、長い前髪で隠されている。

眼帯で隠してもいいのだが、刹那の言うとおりティエリアを気遣ったの事だった。

辛い記憶を甦らせない様に、眼帯はしていない。

恋心と友情。

感情の根源は違えど、している事は同じという事だ。

虚を突かれて足を止めたアレルヤを後目に、刹那は足を速めてティエリアの部屋の前に辿り着いた。

遅れて着いたアレルヤに目配せし、落ち着いた声を意識して扉の向こうに声をかける。

「ティエリア・・・？」

返事は無い。

しかし、他の場に姿を現していないから、部屋に居るはずなのだ。

「・・・俺だ、ティエリア。眠っているのか？」

少し声を大きくしても、返答は無かった。

だが、ティエリアは人の気配に敏感で、たとえ眠っていたとしても、声をかければ直ぐに目覚める事を刹那は知っていた。

「ティエリア！」

「・・・開けよう」

呼びかける声の焦りに気付いたアレルヤが、取っ手に手をかける。

個室にはそれぞれ、番号式のロックが掛けられる。

鍵が掛かっている事を予測して、試しに強く引いてみると、予想に反してするりと扉は開かれた。

灯りも点いておらず、真つ暗な部屋に我先に飛び込んだ刹那は、見回さずとも目的の人物を見つけて駆け寄った。

「おい！ 大丈夫か！？」

ベッドを背にして、床に座り込んでいるティエリアを抱き起こす。細い体は力無く、瞳も閉じられている。

「ティエリア！ 俺が分るか！！」

声に反応しない状態に激しい焦燥を感じながらも、手を翳して確認してみると、呼吸は正常だ。

軽く頬を叩いて意識を呼び覚ますと、長い睫毛に縁取られた瞳がやつと開かれた。

「……」

「俺が分るか？」

「……せつ……な……」

ティエリアの瞳が、確かに刹那を認識している事を確認して、刹那とアレルヤは安堵を息を吐いた。

傍らに膝をついて、アレルヤは顔色を覗き込む。

元々白い頬は更に透明さを増していたが、それでも大事では無さそうだ。

「全く心配させて……どこか具合が悪いとか無い？」

「アレルヤ……いや、眠っていたただけだ……」

寝起きのせいか、気だるそうに頭を振るティエリアの頬を、刹那はそっと触れて体温を確かめた。

本人が気付いていない体調の変化をみるためだったが、必要は無かった。

それでも気になる刹那は、脈をみたり、瞳を覗き込んだりと、心配している。

呆れた様子で刹那の動きを見ながら、そのままの調子でアレルヤは言った。

「眠るにしても、寝過ぎじゃない？ 医務室の先生も体を診せろって怒ってたし、食事位は取った方が良くと思うよ」

「怪我はもう完治している。ただ食欲が・無かったただけだ。・・・それより、」

アレルヤの問いに答えていたと思ったら、ティエリアが急に視線を彷徨わせる。

刹那にも、アレルヤにも焦点が合わさっていない。

近くを見ている様で何処か、遠くを見ている虚ろ気なその瞳は、何かを探している様だ。

「 ロックオンはどこだ？ 」

何の邪気も無いティエリアの言葉に、刹那とアレルヤは息を呑んだ。一瞬、何を問いかけられたのかさえ、分からなくなっただけだ。

「 ・ ・ ・ ・ ・ 」

「 どうしたの、ティエリア ・ ・ ？ 」

何も言えなくなってしまう刹那に対して、アレルヤは声を荒げる。驚き、両極端な反応を示す。

「君・・・なに言ってる！」

「・・・あ」

その大きな声で正気に引き戻され、ティエリアの瞳に生気が宿る。今、自分が口にした言葉を頭の中で反芻し、ありえない質問をした事に気が付いた。自分は何を言っているのだろうと、ティエリアの中でも混乱があった。

「・・・すまない。忘れてくれ・・・」

恥じ入りながら謝罪する。

ロックオンは死んだ。もう帰って来ない人なのだ。分っているのに一瞬、意識がどこかへ飛んでいた。

自分の発した言葉に動揺しているティエリアを、落ち着かせる意味も込めて、刹那が口を開く。

「食堂に行くぞ。何か食べなければ」

「賛成。それに・・・怪我が治ったら、一緒に食べてくれる約束ですよ？」

故人の名を出すことで暗くなりかけた空気を、アレルヤが打ち消す。

「ああ・・・」

戸惑いながらも、ティエリアも頷く。

二人の気遣いに、素直に頼る事にした。

刹那とアレルヤに支えられて、ティエリアは真つ暗な部屋を出る。食事をして気持ちを落ち着かせれば、もうこんな出来事は無いと、三人が思っていた。

だが、じわじわと、その身に迫るモノがあった。

02 (後書き)

サイトにも遊びに来ていただけると嬉しいです。

<http://sweety.jp/offlimits/>

三カ月の時が経ち、動きを制限していた怪我が完治した三人は、まだ猶予がある第二段階への準備を始めた。

ガンダムを使用する事が出来ないため、マイスターとしての作戦は無く、ソレスタルビーイングの一員として作戦に参加した。

組織と云えど、隠密行動が出来る者は限られていて、人手不足が現状だ。

そのため、物資調達でも連絡役でも、三人は与えられる役目は何でもこなす。

地球に下りて協力者に話をつける、指定された物資を見つからずに母船まで運ぶ、人を送り届けるなんて作戦も三人一組として順調にこなして行った。

作戦が滞りなく、順調に行われたのは本当だ。

だが、異変は僅かに、少しずつ侵食する様に蝕んでいった。

気付きながらも、それを止める事が出来ない者が一人。

異変に、ようやくと気付いた者が一人。

後者は、アレルヤだった。

「お疲れ様」

そう、搭乗口から入ってきた刹那に芳いの言葉をかけたのは、アレルヤだ。

今回の作戦も刹那、アレルヤ、ティエリアの三人で行ったのだが、途中から別行動だった為、帰還が別々になったのだ。

ティエリアとアレルヤは少し先に母船に到着しており、刹那が最後だった。

「ああ。・・・報告は何処に？」

スメラギの居場所を訊く刹那に、アレルヤは今さっき報告に向かった場所を教え、自分も共に歩く。

歩きながら横を向くと、同じ目線に赤い瞳がある。黒髪は、アレルヤと同じ位置で揺れていた。

「どうした」

「いや、ずいぶん伸びたなと思って」

アレルヤがついまじまじ見てしまうのも仕方ないくらい、急激に刹那の身長は伸びていた。

前々から徴候はあったのだが、特にこの一、二ヶ月で急成長した。

17歳になった今では、ティエリアの身長を越し、アレルヤとそう変わらない位になっている。

「僕の身長を越すのは、勘弁してほしいな」

「自分でどうこうなるものじゃないだろう」

「それはそうだけどね」

口惜しいというか、微妙な気分なのだ。

友の成長は喜ぶべきものなのだが、これまで身長も年齢も下の刹那を、まるで弟の様に思っていたのだ。

それが今では筋肉も付いて精悍な、17歳らしい青年になっている。兄の男心というか、アレルヤの微妙な心情を理解できない刹那は、首をかしげながらも目的の部屋に辿り着き、扉を開けた。

室内にスメラギの姿を見止めると、帰還を告げる。

「刹那・F・セイエイ、戻った」

「おかえりなさい」

毎回の事だが、スメラギは自分の目でマイスターたちの無事を見て、安堵の表情を浮かべる。

戦術予報士として立てる作戦は、成功を確信してから三人に言い渡されるのだが、それでもイレギュラーはある。不確定要素や思わぬ出来事で作戦が揺らがないかと、いつも気にしているのだ。

「先に戻った二人から、大体の話は聞いたわ。成功のようね」

「ああ、滞りなくな。これが要望の品だ」

懐から小さなケースを取り出し、スメラギに手渡す。

今回の作戦内容は、協力者の手から、母船までこのケースを運ぶ事だ。

中身はプログラムが保存されたディスクで、それをスメラギの手に届けて作戦完了だ。

受け取ったスメラギは、慎重に中身を確認した。

「・・・確かに受け取ったわ。これで完了ね。お疲れ様」

その言葉を受けて、刹那は後ろに控えていたアレルヤに向く。

「あいつは？」

「たぶん、部屋に居ると思うよ」
「そうか」

あいつ、というのはティエリアの事なのだが、少ない言葉で伝わるのにも意味があった。

作戦で別行動になったり、ちょっと姿が見えないだけでも、刹那はアレルヤに同じ事を尋ねるのだ。

既に習慣付いてしまっていて、刹那が「あいつ」と言えばティエリアなのだ。

「あの子、作戦中もあんな風だったりするの？」

「まあ・・・ずっと、って訳にも行かないですけどね。真面目に作戦に取り組んでいるんですけど、気にはしていますよ」

刹那は心配してティエリアを気にしているのだろうが、スメラギにはまるで、親鳥を追いかけるヒヨコの様に見える。

そう見えるくらい、ティエリアが落ち着いているからだろう。

数ヶ月前、ロックオンを喪った当初は精神的にも落ち込み、不安定な状態が続いていたが、今は元のティエリアに戻っている。

食堂でも刹那と一緒に居る所を見かけるし、ソレスタルビーイングとしての作戦も完璧に遂行していた。

同じ様に刹那の姿は、アレルヤの目には想い人の気を引こうと、必死に視界に入ろうとする幼さに見えていた。

そう、見えていたのだが

作戦から戻った夜。

アレルヤが自分の部屋に戻ろうとしていた時のことだ。

マイスターたちの部屋は、独身者層にある。

並んで、とまではいかないが、比較的近い場所になっている。

アレルヤがある部屋の前を過ぎようとすると、小さな物音が聞こえた気がした。

他の部屋から聞こえたなら気にもしないのだが、自分の耳を疑いながらも、足を止めた。

そこは、ロックオンの部屋だった場所だ。この母船に留まる際、いつも彼が使っていた部屋だ。

作戦の第一段階の為、プロレマイオスに移った時に荷物は全て片付けられ、空き部屋になっているはずなのだが。

「……………」

気になってそつと部屋の中に聞き耳を立てる。

人の声が聞こえる。何を話しているかまでは聞き取れないが、二人の人間が会話しているのは確かだ。

誰かは分らないが、これでは盗み聞きになってしまう。

それは趣味が悪いと、部屋の前を離れようとして瞬間、不意に扉が開いた。

「…………刹那、と…………テイエリア？」

「…………っ!？」

対面した両者、思わず人物の登場に目を見開いた。

部屋から出てきたのは、テイエリアを抱きかかえた刹那で、腕の中の佳人は瞳を閉じて眠っているように見える。

そこまでは良かったのだ。眠っているテイエリアを心配して、刹那

が部屋まで送るといふなら、それで良かった。
だが、アレルヤは気付いてしまう。

二人の髪が濡れている事に。二人の着衣が乱れている事に。
特別な、濃密な空気をまとっている事に。
この部屋で何があったかは明白だった。

「えっと・・・ごめん、僕・・・」

二人がそういう関係になっても、それは良いのだ。

刹那の想いが叶ったのなら、喜ばしい事だ。

だが、人の情事を覗いた気分で、気恥ずかしくてその場を立ち去ろうとするアレルヤは、更に驚く事になる。

「・・・ロック、オン・・・」

「・・・え？」

眠っていると思っていたティエリアが、その腕を刹那の首に絡め、口付けたのだ。

刹那も、照れる様子もなく応えている。

それが、恋人同士の口付けなら良かった。想い合う者が愛を伝える行為なら良かった。

しかし、ティエリアの表情は虚ろで、視線は刹那の方を向いていても、その瞳には故人しか映っていないかった。

離れた唇も、ついさっきまで触れていた相手の名前を形どる事はなく、ロックオン、ロックオンと、小さく呟きながら、ティエリアは刹那の胸元に顔を埋めた。

とても正気と思えないその姿に、アレルヤは声が大きくなるのを抑えられなかった。

「どうして・・・何があったんだ!？」

「声が大きい」

「そんな事を言っている場合じゃないだろう！」

周りには誰も居ないのに、あまりに冷静な刹那の言葉に、アレルヤの苛立ちが募る。

だが責められている当人は、アレルヤの登場に驚いてはいても、テイエリアの仕草は受け入れている。

昨日今日の事ではないのだろう。

「いつ、いつから彼は！」

「……」

「刹那!？」

動転するアレルヤを見て、もう隠し切れない事を悟った刹那は、本当に眠ってしまったテイエリアを本人の部屋へ運び、ベッドに横たえると、自室へとアレルヤを誘った。

刹那の部屋は、入って見える所に私物が全く無く、閑散としていた。この部屋では客人であるアレルヤに、一応椅子を勧めたが落ち着かない様子で座らずに、二人で立ったまま向かい合う。

刹那は苦い顔で言葉を探していて、アレルヤはしきりにテイエリアの部屋の方を気にしていた。

「彼は・・・あのままで大丈夫なのかい？」

「・・・眠ってしまったえば、朝まで起きない」

覚悟を決めて、やっと重い口を開く。

「目が覚めれば、夜の出来事は覚えていない」

「昼間、僕たちと会う時や、作戦の時は正気だったじゃないか・・・！」

「いつもじゃない。数日間隔で、決まって夜にああなる。・・・触れさえすれば、元に戻るんだ」

とつとつと、今までの経緯を明かす。

「いつからなの・・・？」

「・・・前にお前と、ティエリアの部屋に行った事があるな。・・・それからだ」

「っ！」

ティエリアが部屋に籠った時のことだ。あれからもう、何ヶ月も経っている。

その間アレルヤは、冷静なティエリアを見て、無口な刹那を見て、いつもどおりだと安心していたのに、それは蜃気楼の様なもので。

自分の知らない間に、友は精神に異常をきたし、もう一人の友はそれをたった独りで抱え込んでいたのだ。

あまりの薄情さに、怒りさえ湧いた。

「どうして！ 話してくれなかったんだ・・・」

穏やかな表情の多いアレルヤの、慟哭ともいえる嘆きに気付き、刹

那はすまなそうに俯いた。
身長が伸びても、外見的に大人になっても、俯くその姿に少年の頃
が垣間見える。

「俺のエゴだ……。どんな理由であっても、あいつに他の男を近づ
けたくなかった」

惚れてしまった故の独占欲。

「……時間が経てば、落ち着くと思っていた」

幼さ故の迷い。

刹那自身、崩れてしまったティエリアに、戸惑っていたのだ。

「でも間違っているよ、それは……。いくら体を繋げたって、テ
ィエリアの瞳に君は映っていない！ ロックオンの代わりに求めら
れて、それで嬉しいの?!」

泣きたくなる様な気持ちだが、アレルヤの中で渦巻いていた。

刹那がどれだけティエリアを想っているのか知っている。ティエリ
アが失う事に耐え切れず、他人に影を求めたのだと分っている。

間違いだと口にしながら、どれが正解で、どこが真実なのか、アレ
ルヤにも分らなかった。

「俺は……」

アレルヤの言葉に押され、刹那は壁に背を付く。
だが、その言葉を、頭を振って拒絶した。

「俺は、拒めない……！ ティエリアが哀しんで、苦しんで・

「・・・求められれば、突き放せないっ！」

たとえ、自分の名を呼んでももらえなくても、好きな人が自分を見てくれなくても。

愛しいその瞳が、切なげに潤めば抗えない。伸ばされて腕を、振り解く事など出来ない。

「君の気持ちは、どこにいくんだ」

部屋に静かに響く声に、ハツとして刹那が顔を上げる。

アレルヤの投げかけた言葉は、確かに真実だった様だ。

刹那のその顔は、今にも泣きそうで・・・行き場の無い気持ちを、胸に抱え込んでいたのだ。

怒りを、どうしようもない気持ちを抑えて、アレルヤは泣きそうな少年を見つめる。

「僕も協力するから、ティエリアが元気になる様に」

「・・・っ」

刹那は、顔を背ける様に頷いた。

二人とも、胸の中には、愛情や友情、混乱が渦巻いている。

方法も、未来も、何も見えてはいない。

身長が伸びても、20歳を過ぎてても、まだ端境期を抜け切れず・・・子供の様に頼る事も、大人のように切り捨てる事も出来なくて。

迷い、どうしたら良いのかも分からないまま。

ただ、強い気持ちだけがそこに有った・・・。

03 (後書き)

サイトにも遊びに来ていただけると嬉しいです。

<http://sweety.jp/offlimits/>

テイエリアは目覚めると、自分の部屋のベッドの中に居た。

「うん・・・」

意識をゆっくりと覚醒させながら体を起こすと、倦怠感がおそつやけに気だるくて、力を入れると腰が鈍く痛んだ。

何かしただろうか？ と昨夜の記憶を辿るが、ロックオンの部屋に行った所までしか覚えていない。

最近の癖になつてしまっているのだが、そこに遺品も何も無くとも、居ると恋人を思い出せて落ち着けるのだ。

だから昨夜も寝付けなくて部屋に向かったのだが、入ってベッドに腰掛けた所までは覚えている。

しかし、いつ戻ってきたのか、いつ寝たのかまでは思い出せなかった。

『コンコン』

唐突に聞こえたノックの音に、自分の記憶にとりあえず寝ぼけていたのだろつと結論付ける。

「ティエリア、起きている?」

アレルヤの声だと気付き立ち上がると、扉を開けた。

廊下には、にこやかに朝の挨拶をする青年が立っている。

「おはよう」

「ああ」

「……」

答えるティエリアの顔をまじまじと見ながら、アレルヤは眉を歪めた。

「……いつもの、ティエリアだね……」

「何のことだ?」

「……覚えていない?」

アレルヤが何を言いたいのか、話が見えずに訝しく思う。

問いかけているのに、問いで返されて、ティエリアの眉間には更にシワが寄る。

本当に覚えていないのか……、と小さく呟いたアレルヤを、しつこいと思いつつも、何でも無いとはぐらかされてしまった。

意味深にため息をついて、やっとアレルヤは本題に入った。

「ラボでイアンが待っていると、君を呼びに来たんだ」

「!?!?」

「そう、ガンダムの事だよ」

ラボとは、LABORATORY 研究室の事だ。

ソレスタルビーイング内でラボと呼ばれるのは、ガンダムの研究室だけで、イアン・ヴァステイはその研究者だ。

先の作戦で四機全てが全壊ないし半壊した為、今そのラボでは新しくガンダムが作られている。

そう数日で完成するものではないが、制作段階で様々な調整が必要な為、マイスターは駆り出されるのだ。

そしてその調整は、ティエリアにとって待ち望んだモノであった。待望の呼び出しに、気持ちが急いでティエリアは部屋を飛び出した。

「ちょっと待って、僕も一緒に行くんだ！」

「あ、ああ……」

追いかけて来たアレルヤを見て、ようやくと落ち着く。

歩調をゆっくりにしよう意識するが、ついつい早く、早く足が出た。

ティエリアがこんなに急ぐのも無理はない。

ガンダムとは、ティエリアにとってとても重要な存在で、生とも存在とも等しいモノだ。

自分の生きる理由は、存在する理由はガンダムと繋がっていると、そう考えていたのだ。

そのガンダムを一度は失ってしまったせいで、身が欠けたかの様な衝撃を受けた事もある。

だから、新たなガンダムが、自分が乗るガンダムが有るという事、制作されているという事に、至上とも言える喜びを感じるのだ。

平静になるうと努力はしてみたが、最後には駆けてしまっていた。

テイエリアが研究室に駆け込むと、少し間を置いてアレルヤも入ってくる。

この母船内で一番大きな空間である、研究室内には先に刹那がやって来ており、テイエリアたちを待っていた。

刹那も、テイエリアと同じ様な表情をしている。期待と興奮に頬を紅潮させた、子どもの様な表情だ。

二人ともガンダムに傾ける想いは強く、新たな機体の完成を待ち望んでいるのだ。

「おう、来たか。早速だがまずは・・・テイエリア上がってくれ」

そう声をかけたのは、様々な機材に囲まれたイアンだった。

他の研究者に指示を出しながら、自分でも手を動かして着実にガンダムを完成へと近づけている。

テイエリアに上がるように指示したのは、研究室中心にある枠組みで、そのまた中心には機体のコクピットが置かれている。

外装も無く、操縦者の座る椅子と操作用の機器が、イアンたち研究者の操る機材とコードで繋がっているだけだ。

まだ機体の形さえ見えない。

「はい」

それでも、テイエリアには目を輝かさなばかりの代物だ。

造られている機体は三体、その中の一つに上がり操縦席に座った。

とりあえず組み立ててあるといった状態で、座り心地の良いものは無かったが、操縦桿を握ると胸が奮えた。

「適当に動かしてみてくれ、反応をみたいんだ」

プログラムの調整の為、イアンの云うとおりに操縦桿を動かす。

「どうだ、鈍いとかズレとかあるか？」

「いや、・・・問題無い」

まだ操作しても、腕部分や足部分は付いて無いのだから動くわけが無いが、プログラムの反応は大したものでティエリアは驚きを感じる。

「この反応速度なら、パーツ装着後のラグも大きくは無いだろう」

「お前がそう言うなら、良さそうだな。じゃあ次は・・・」

イアンが挙げていく様々箇所を、ティエリアが確認していく。その作業が終わりに差し掛かる頃、電子音声が響いた。

『ティエリア・・・ティエリア・・・！』

「っ」

名前を呼ばれて、思わず息を呑んだのも無理はない。

ピコピコと音を立てて近づいてくるオレンジ色のハ口は、ずっとロツクオンの傍にあったモノだ。

先の作戦で使われた、ロツクオンの搭乗機であるデユナメスには高度砲撃機能を取り付けられており、その補助装置としてハ口が用いられていた。

デユナメスが破壊されてしまった現在は、ハ口を設置する機体が無

い為、研究室内に置かれているが、まさに相棒の様にハ口はロツクオンと共に在ったのだ。

全てが宇宙へと消えたロツクオンの、唯一の遺品とも云える。

ティエリアにとって、ハ口は恋人を思い出す縁であり、辛い記憶を呼び戻すキツカケなのだ。

・ロツクオンツ・ロツクオンツ・ロツクオンツ・

あの時、ロツクオンの死を知った時の、ハ口の叫びが耳に甦る。衝撃ともいえる喪失感。

それを、ハ口の電子音声を聞くと思い出してしまうのだ。

『ティエリア・ガンダム？ ティエリア・』

「イアン・ヴァステイ、残りはどこだ？」

「そうだな、あとは・・・」

操縦席に近づいてきたハ口を無視して、ティエリアは作業を続けた。イアンを急かして調整を終えると、逃げるようにコクピットを降りてしまう。

「ちょっと待て！ ガンダムに新しい機能を付ける、その操作説明だ。持っていけ」

足早に去ろうとするティエリアを、慌ててイアンは呼び止めて分厚い書類を渡す。

俯いたままそれを受け取ったティエリアは、再び逃げるように研究室を出た。

イアンはティエリアの変化に気付いていない様だが、これまでの様子、アレルヤと刹那は注意深く見つめていた。

ハ口をふり切ってティエリアが向かったのは、自分の部屋ではなく、空き部屋・ロックオンの部屋だった。

走ったのは違う、感情の高ぶりで鼓動が跳ねた。

崩れ落ちる様に床に座り込み、胸を押さえる。

「・・・ロックオンッ」

自分に言い聞かせるように、まるで魔法を唱えるかのように、名前を繰り返し呟く。

アレルヤの右目も、ハ口も、ロックオンを思い出すモノを見ると、感情の押さえが利かなくなるのに、なぜかこの部屋に来ると心穏やかになれた。

何一つ、ロックオンを思い出させる物は残っていないのに、それでもこの部屋には安らかな時間が、幸せの記憶が残っている。体を丸めながら名前を呼ぶ度に、ゆっくりと心が凪いでいく。

だが同時に意識が白く遠ざかっていく事に、ティエリアは気付いていなかった。

不思議な浮遊感と体のゆれを感じて、目を覚ます。
瞳を開くと、刹那の横顔が飛び込んできた。

「　　っ!?!?」

ティエリアは、思わぬ場景にビクリと体を竦ませた。
それに気が付いた刹那が、足を止める。

「起きたか」

「ああ・・・!」

言いながら、自分の状況を見下ろしてティエリアは更に驚く羽目になつた。

足が、体が浮いているのだ。

確かにここは宇宙空間だが、船内は重力装置が作動していて勝手に体が浮く、という事は無い。

なのにティエリアの意思に反して、床に足がついていないのは、刹那がティエリアの体を抱き上げているせいだ。

両腕を使い、まるで女性にするかの様に横抱きになっている。

「お、下ろせ！ 何でお前がここに居る！」

自尊心というものがある。軽々と持ち上げられていては、気恥ずかしいのだ。

ジタバタと暴れながら、周りを見て気が付く。

ついさつき・・・記憶のある限りではロックオンの部屋に居たというのに、今は廊下に居る。

何故こんな体勢になっているのか状況は飲み込めないが、だからといって抱き上げられているのは落ち着かない。

「下ろせ！」

「やめておいた方が良くと思うが」

「良いから下ろせ、刹那・F・セイエイ！！」

仕方ない、といった様子でため息をついた刹那は、腕を下ろしティエリアを立たせた。

しかしティエリアの思いと反して、刹那が手を離すと共に床に崩れ落ちてしまう。

「っっ！」

体に力が入らず、足が重くて立ち上がれない。

正常とは言えない体調に、何故こんな風に？ と、混乱がティエリアの中を占めた。

「だから言っただろう。無理をするな」

全てを分っているような口調の刹那が、座り込んでいるティエリア

を立たせようと手を添えた。

刹那の手に支えられて立ち上がることは出来たが、ティエリアはまだ混乱していた。

自分の記憶に無い体の疲れ、そして何故それを刹那が理解しているのか。

考えながらも頭がうまく働かない。刹那に半分抱かれている様な状態で歩き出す。向かっているのはティエリアの部屋らしく、慣れた道筋である廊下の角を曲がった所で、アレルヤに出くわした。

「刹那、君、急に居なくなるからイアンが怒ってい・・・ティエリアは、どうしたの？」

「私はなんでもない・・・貴様、もしかしてガンダムの調整をすっぽかしているのではないだろうか？」

アレルヤの問いに答えながらも、ティエリアの耳は言葉の前半を聞き取っていた。

「・・・」

無言での是認に、ガンダム重視のティエリアが苛立つ。

「さっさと行って来い！」

言いながら、自分を支える手を解いて突き飛ばそうとする。

ティエリアの抵抗を抑えながら刹那は、余計な事を、と言わんばかりに盛大にアレルヤを睨んだ。

だが、諦めたかの様に息をつく、腕の中のティエリアをさし出す形で前へ押す。

それにアレルヤは苦笑で応え、ティエリアを支える役目を交代した。二人のその扱いに、ティエリアは少なからず苛立ちを覚えるのだが、

体が動かないせいでこれ以上の抵抗は出来なかった。

「行き先は、君の部屋で良いのかな」

「……ああ」

ラボへを向かった刹那を見送ってから、二人は歩き出す。

突然に切り出したのは、アレルヤだった。

「最近……刹那とはどうなの？」

「どうとは？」

「だから……」

歯切れの悪く言葉を濁す。

なんとか絞り出したのは、まるで子どもに向ける様な言葉になってしまった。

「仲良く、してる？」

「なんだそれは。別に……普通だが」

「普通って……そうじゃなくてさ、最近、良く一緒に居るじゃない。食事の時とか……それ以外でも」

「向こうがまとわり付いて来るだけだ。何が訊きたい？」

アレルヤの煮え切らない物言いに、ティエリアの語調が強くなる。

「うん……じゃあ、刹那の事をどう思う？」

「どうって……同じガンダムマイスターだろう」

「それだけなの？ もっと他にもあるでしょう、一緒に生活してるんだから」

「何が言いたい。マイスターと云う以上の関係性が必要なのか？」

ティエリアの言は正論で、対して言葉に詰まる。

今、この母船に居る者、この組織に属する者の悲願は戦争根絶。それを成すための仲間であるのだから、それ以上に親密になる必要はないのだ。仕事として受け止めるなら、それが正論だ。

だが、違つと、それは違つとアレルヤは今にも叫びだしそうな気持ちだった。

アレルヤの知る事実と目の前の現実が食い違い、もどかしさが溢れてくる。

「残酷だよね・・・」

思わず呟いていた。

「私が、彼に非道な行いをしていると言つのか？」

「違つよ、君に言っているんじゃない」

「なら誰に」

「この・・・巡り逢わせに」

眉間に深い皺を刻みながら、それでも微笑んだアレルヤの表情は、ティエリアには今にも泣きそうに見えた。

ティエリアにとってそれは意外な一面であり、アレルヤがなにを見て、なにを思つてその言葉を発したのか分らなかつた。

だが、どこか引つかかる。アレルヤの言葉が、自分に向けられている様な気がして。

今朝も、アレルヤはティエリアへ腑に落ちない言葉を残している。

あれはどういう意味で、どれだけ重要な物なのだろうか。

アレルヤに送り届けられた後も個室で一人、ティエリアは考えを巡らせ始めていた。

04 (後書き)

サイトにも遊びに来ていただけると嬉しいです。

<http://sweety.jp/offlimits/>

テイエリアは目覚めると、自分の部屋のベッドの中に居た。

「うん・・・」

意識をゆっくりと覚醒させながら体を起こすと、倦怠感がおそろ。やけに気だるくて、力を入れると腰が鈍く痛んだ。

何かしただろうか？ と昨夜の記憶を辿るが、ロックオンの部屋に行った所までしか覚えていない。

最近の癖になってしまっているのだが、そこに遺品も何も無くとも、居ると恋人を思い出せて落ち着けるのだ。

だから昨夜も寝付けなくて部屋に向かったのだが、入ってベッドに腰掛けた所までは覚えている。

しかし、いつ戻ってきたのか、いつ寝たのかまでは思い出せなかった。

『コンコン』

唐突に聞こえたノックの音に、自分の記憶にとりあえず寝ぼけていたのだらうと結論付ける。

「ティエリア、起きている？」

アレルヤの声だと気付き立ち上がると、扉を開けた。

廊下には、にこやかに朝の挨拶をする青年が立っている。

「おはよう」

「ああ」

「・・・」

答えるティエリアの顔をまじまじと見ながら、アレルヤは眉を歪めた。

「・・・いつもの、ティエリアだね・・・」

「何のことだ？」

「・・・覚えていない？」

アレルヤが何を言いたいのか、話が見えずに訝しく思う。

問いかけているのに、問いで返されて、ティエリアの眉間には更にシワが寄る。

本当に覚えていないのか・・・、と小さく呟いたアレルヤを、しつこいと思いつつも、何でも無いとはぐらかされてしまった。

意味深にため息をついて、やっとアレルヤは本題に入った。

「ラボでイアンが待っていると、君を呼びに来たんだ」

「!？」

「そう、ガンダムの事だよ」

ラボとは、LABORATORY 研究室の事だ。

ソレスタルビーイング内でラボと呼ばれるのは、ガンダムの研究室だけで、イアン・ヴァステイはその研究者だ。

先の作戦で四機全てが全壊ないし半壊した為、今そのラボでは新しくガンダムが作られている。

そう数日で完成するものではないが、制作段階で様々な調整が必要な為、マイスターは駆り出されるのだ。

そしてその調整は、ティエリアにとって待ち望んだモノであった。待望の呼び出しに、気持ちが急いでティエリアは部屋を飛び出した。

「ちょっと待って、僕も一緒に行くんだ！」

「あ、ああ・・・」

追いかけて来たアレルヤを見て、ようやくと落ち着く。

歩調をゆっくりにしようと思意識するが、ついつい早く、早く足が出た。

テイエリアがこんなに急ぐのも無理はない。

ガンダムとは、テイエリアにとつてとても重要な存在で、生とも存在とも等しいモノだ。

自分の生きる理由は、存在する理由はガンダムと繋がっていると、そう考えていたのだ。

そのガンダムを一度は失ってしまったせいで、身が欠けたかのような衝撃を受けた事もある。

だから、新たなガンダムが、自分が乗るガンダムが有るとい事、制作されているという事に、至上とも言える喜びを感じるのだ。

平静になるうと努力はしてみたが、最後には駆けてしまっていた。

テイエリアが研究室に駆け込むと、少し間を置いてアレルヤも入っ

てくる。

この母船内で一番大きな空間である、研究室内には先に刹那がやって来ており、ティエリアたちを待っていた。

刹那も、ティエリアと同じ様な表情をしている。期待と興奮に頬を紅潮させた、子どもの様な表情だ。

二人ともガンダムに傾ける想いは強く、新たな機体の完成を待ち望んでいるのだ。

「おう、来たか。早速だがまずは・・・ティエリア上がってくれ」

そう声をかけたのは、様々な機材に囲まれたイアンだった。

他の研究者に指示を出しながら、自分でも手を動かして着実にガンダムを完成へと近づけている。

ティエリアに上がるように指示したのは、研究室中心にある枠組みで、そのまた中心には機体のコクピットが置かれている。

外装も無く、操縦者の座る椅子と操作作用の機器が、イアンたち研究者の操る機材とコードで繋がっているだけだ。

まだ機体の形さえ見えない。

「はい」

それでも、ティエリアには目を輝かさばかりの代物だ。

造られている機体は三体、その中の一つに上がり操縦席に座った。

とりあえず組み立ててあるといった状態で、座り心地の良いものは無かったが、操縦桿を握ると胸が奮えた。

「適当に動かしてみてくれ、反応をみたいんだ」

プログラムの調整の為、イアンの云うとおりに操縦桿を動かす。

「どうだ、鈍いとかズレとかあるか？」
「いや、・・・問題無い」

まだ操作しても、腕部分や足部分は付いて無いのだから動くわけが無いが、プログラムの反応は大したものでティエリアは驚きを感じる。

「この反応速度なら、パーツ装着後のラグも大きくは無いだろう」
「お前がそう言うなら、良さそうだな。じゃあ次は・・・」

イアンが挙げていく様々箇所を、ティエリアが確認していく。
その作業が終わりに差し掛かる頃、電子音声が響いた。

『ティエリア・・・ティエリア・・・！』
「っ」

名前を呼ばれて、思わず息を呑んだのも無理はない。

ピコピコと音を立てて近づいてくるオレンジ色のハ口は、ずっとロックオンの傍にあったモノだ。

先の作戦で使われた、ロックオンの搭乗機であるデユナメスには高度砲撃機能を取り付けられており、その補助装置としてハ口が用いられていた。

デユナメスが破壊されてしまった現在は、ハ口を設置する機体が無い為、研究室内に置かれているが、まさに相棒の様にハ口はロックオンと共に在ったのだ。

全てが宇宙へと消えたロックオンの、唯一の遺品とも云える。

ティエリアにとって、ハ口は恋人を思い出す縁であり、辛い記憶を呼び戻すキツカケなのだ。

八口をふり切ってテイエリアが向かったのは、自分の部屋ではなく、空き部屋・・ロックオンの部屋だった。走ったのとは違う、感情の高ぶりで鼓動が跳ねた。崩れ落ちる様に床に座り込み、胸を押さえる。

「・・・ロックオンッ」

自分に言い聞かせるように、まるで魔法を唱えるかのように、名前を繰り返して呟く。

アレルヤの右目も、八口も、ロックオンを思い出すモノを見ると、感情の押さえが利かなくなるのに、なぜかこの部屋に來ると心穏やかになれた。

何一つ、ロックオンを思い出させる物は残っていないのに、それでもこの部屋には安らかな時間が、幸せの記憶が残っている。体を丸めながら名前を呼ぶ度に、ゆっくりと心が凪いでいく。

だが同時に意識が白く遠ざかっていく事に、テイエリアは気付いていなかった。

+
+
+
+

不思議な浮遊感と体のゆれを感じて、目を覚ます。
瞳を開くと、刹那の横顔が飛び込んできた。

「　　っ!?!」

ティエリアは、思わぬ場景にビクリと体を竦ませた。
それに気が付いた刹那が、足を止める。

「起きたか」

「ああ……!」

言いながら、自分の状況を見下ろしてティエリアは更に驚く羽目になつた。

足が、体が浮いているのだ。

確かにここは宇宙空間だが、船内は重力装置が作動していて勝手に体が浮く、という事は無い。

なのにティエリアの意思に反して、床に足がついていないのは、刹那がティエリアの体を抱き上げているせいだ。両腕を使い、まるで女性にするかの様に横抱きになっている。

「お、下ろせ！ 何でお前がここに居る！」

自尊心というものがある。軽々と持ち上げられていては、気恥ずかしいのだ。

ジタバタと暴れながら、周りを見て気が付く。ついさつき・・・記憶のある限りではロックオンの部屋に居たというのに、今は廊下に居る。

何故こんな体勢になっているのか状況は飲み込めないが、だからといって抱き上げられているのは落ち着かない。

「下ろせ！」

「やめておいた方が良いと思うが」

「良いから下ろせ、刹那・F・セイエイ！！」

仕方ない、といった様子でため息をついた刹那は、腕を下ろしティエリアを立たせた。

しかしティエリアの思いと反して、刹那が手を離すと共に床に崩れ落ちてしまう。

「っ！」

体に力が入らず、足が重くて立ち上がれない。

正常とは言えない体調に、何故こんな風に？ と、混乱がティエリアの中を占めた。

「だから言っただろう。無理をするな」

全てを分っているような口調の刹那が、座り込んでいるティエリアを立たせようと手を添えた。

刹那の手に支えられて立ち上がることは出来たが、ティエリアはただ混乱していた。

自分の記憶に無い体の疲れ、そして何故それを刹那が理解しているのか。

考えながらも頭がうまく働かない。刹那に半分抱かれている様な状態で歩き出す。向かっているのはティエリアの部屋らしく、慣れた道筋である廊下の角を曲がった所で、アレルヤに出くわした。

「刹那、君、急に居なくなるからイアンが怒ってい・・・ティエリアは、どうしたの？」

「私はなんでもない・・・貴様、もしかしてガンダムの調整をすっぽかしているのではないだろうか？」

アレルヤの問いに答えながらも、ティエリアの耳は言葉の前半を聞き取っていた。

「・・・」

無言での是認に、ガンダム重視のティエリアが苛立つ。

「さっさと行って来い！」

言いながら、自分を支える手を解いて突き飛ばそうとする。

ティエリアの抵抗を抑えながら刹那は、余計な事を、と言わんばかりに盛大にアレルヤを睨んだ。

だが、諦めたかの様に息をつくとき、腕の中のティエリアをさし出す形で前へ押す。

それにアレルヤは苦笑で応え、ティエリアを支える役目を交代した。二人のその扱いに、ティエリアは少なからず苛立ちを覚えるのだが、体が動かないせいでこれ以上の抵抗は出来なかった。

「行き先は、君の部屋で良いのかな」

「……ああ」

ラボへを向かった刹那を見送ってから、二人は歩き出す。突然に切り出したのは、アレルヤだった。

「最近……刹那とはどうなの？」

「どうとは？」

「だから……」

歯切れの悪く言葉を濁す。

なんとか絞り出したのは、まるで子どもに向ける様な言葉になってしまった。

「仲良く、してる？」

「なんだそれは。別に……普通だが」

「普通って……そうじゃなくてさ、最近、良く一緒に居るじゃない。食事の時とか……それ以外でも」

「向こうがまとわり付いて来るだけだ。何が訊きたい？」

アレルヤの煮え切らない物言いに、ティエリアの語調が強くなる。

「うん……じゃあ、刹那の事をどう思う？」

「どうって……同じガンダムマイスターだろう」

「それだけなの？ もっと他にもあるでしょう、一緒に生活してるんだから」

「何が言いたい。マイスターと云う以上の関係性が必要なのか？」

ティエリアの言は正論で、対して言葉に詰まる。

今、この母船に居る者、この組織に属する者の悲願は戦争根絶。それを成すための仲間であるのだから、それ以上に親密になる必要はないのだ。仕事として受け止めるなら、それが正論だ。

だが、違つと、それは違つとアレルヤは今にも叫びだしそうな気持ちだった。

アレルヤの知る事実と目の前の現実が食い違い、もどかしさが溢れてくる。

「残酷だよね・・・」

思わず呟いていた。

「私が、彼に非道な行いをしていると言つのか？」

「違つよ、君に言っているんじゃない」

「なら誰に」

「この・・・巡り逢わせに」

眉間に深い皺を刻みながら、それでも微笑んだアレルヤの表情は、ティエリアには今にも泣きそうに見えた。

ティエリアにとってそれは意外な一面であり、アレルヤがなにを見て、なにを思つてその言葉を発したのか分らなかつた。

だが、どこか引つかかる。アレルヤの言葉が、自分に向けられている様な気がして。

今朝も、アレルヤはティエリアへ腑に落ちない言葉を残している。

あれはどういう意味で、どれだけ重要な物なのだろうか。

アレルヤに送り届けられた後も個室で一人、テイエリアは考えを巡らせ始めていた。

N
E
X
T

05 (後書き)

サイトにも遊びに来ていただけると嬉しいです。

<http://sweety.jp/offlimits/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0715h/>

LAST SMILE

2010年10月10日13時28分発行